岡 一男著
『古典の再評価』

近頃の大学の地域の際ので、私にもなれに学問とは何だとも、自らいう問いかけで、ではおらいない日々がある。それは今さら年がいかなるという名がさ、その裏えの思慮の混じり合わせたしみなものだ、けがは、いつも、理屈も何もない。

Republican部

本書の内容は、序・総説・古代前期・古代後期・中世・結語・索引より成り、全六〇ページ、正に堂々たる大作である。各編は数頁ないし数十頁からなるが、上は事元から下は増補に至る。後者が中心を成すのは、三七〇ページ及び二七〇ページまでに至る。

1 平安文学における風土の意味
2 日本における後宮文学
3 竹取物語
4 伊勢物語
5 宇津保・落葉物語
6 賀茂保憲女

岡氏の学問は、世上じはしばしば実証的考証学の名を以て評されてゐるようであり、私岡氏の真髄は、「あゝ有名な紫式部の伝記」と云ふように考へてある。しかし今回あるたためて、本書の総説の考証にあらると考へてゐる、氏の方法が実証という文字から連想されるがなって、原図集されて来た人間の主義からは違く、むしろ心理学・社会学・歴史学等を広範に動員する幅広い文芸学的方法を想定されている事の知った。本書に「文芸科学の樹立ヘ」という意味の考証の副題が附く。その所以である。若者に目を惹くのは、洋の東西に通じ、古今に亘る該当の知識をとれる知人で、その自名に引立つ。
の自由的な学風でもあり、門外漢には難しいものと思われるのでもある。氏のこうした自由な立場は、具体的な作業中に、随所に見受けられる。たとえば、平安文学における風土の巧みの表現で、氏は、風土は人間を制約するものではなく、知っている人間の創造精神の素材となるにすぎない。云々（九八頁）を云われ、さら

に、平安京には過去の伝統がなく、世界的な新文化を（中略）新らしい民族文化を創造してゆくという気概が、あくまでも人間主体の比較的鑑賞される。すなわち自然美は人間の装飾・さらに環境を同化させて、いったんの世界では模様化されてもいたのである（九八頁）。といわれるが、これからの世界では模様化されてきたのである（九八頁）。

しかし、本書の真骨頂は、やはりその緻密な考証にあるといってもよい。当の考証の結果は、竹取物語編昭作者論、藤原為時の邸宅の考証、六条院宣旨の考証など、いずれも考証の範とすべきものである。いったい本書所収論考は、最初の掲載誌の性格もあるのであろう。さりそべる重要な見解が漏れている事実にある。

しかし、竹取物語編昭作者論、藤原為時の邸宅の考証の一部は、前記の如く、内容の側面にはいかがであろうか（九八頁）。

しかし、しかし、本書の真骨頂は、やはりその緻密な考証にあるといえよう。この考証の結果は、竹取物語編昭作者論、藤原為時の邸宅の考証など、いずれも考証の範とすべきものである。
藤平春男著「新古今歌風の形成」

平成二〇年六月、有栖堂、A5六二〇頁、三八〇円

藤平春男は、新古今歌風の形成に対する学界の深遠な影響をもっており、その研究は、他の研究者たちに大きな影響を与えている。特に、藤平春男の研究は、新古今歌風の形成に対する学界の深遠な影響をもっており、その研究は、他の研究者たちに大きな影響を与えている。特に、藤平春男の研究は、新古今歌風の形成に対する学界の深遠な影響をもっており、その研究は、他の研究者たちに大きな影響を与えている。特に、藤平春男の研究は、新古今歌風の形成に対する学界の深遠な影響をもっており、その研究は、他の研究者たちに大きな影響を与える。